あすなろ賞

Think Globally. Act Locally.

―ユネスコ・世界寺子屋運動への協力を通して―

前橋市立大胡東小学校　教諭
堀澤　直樹（ほりさわ　なおき）

Ⅰ　はじめに

前橋市立東小学校では，平成 16 年度に５年生（４クラス・１３３名）が総合的な学習の時間の活動として，[1]デジタル表現研究会（D-project）の「[2]ユネスコ・[3]世界寺子屋運動[4]リーフレット制作プロジェクト」に参加した。児童はユネスコの活動に触れ，世界寺子屋運動について知る中で，自分にできることを考えていった。「自分も何かしたい。」という思いをリーフレットに込め，「書きそんじハガキ」を集める活動を行った。

学校の教育活動にユネスコ協会がかかわることで，児童の学びが深まり，意欲的に「リーフレット制作活動」に取り組み，「書きそんじハガキ」回収活動を行うことができた。

Ⅱ　活動のねらい

ビデオ視聴やゲストティーチャーの体験談を通して「世界寺子屋運動」について理解し，自分の思いを込めたリーフレットをコンピュータで作り，書きそんじハガキ回収のボランティア活動を行う。

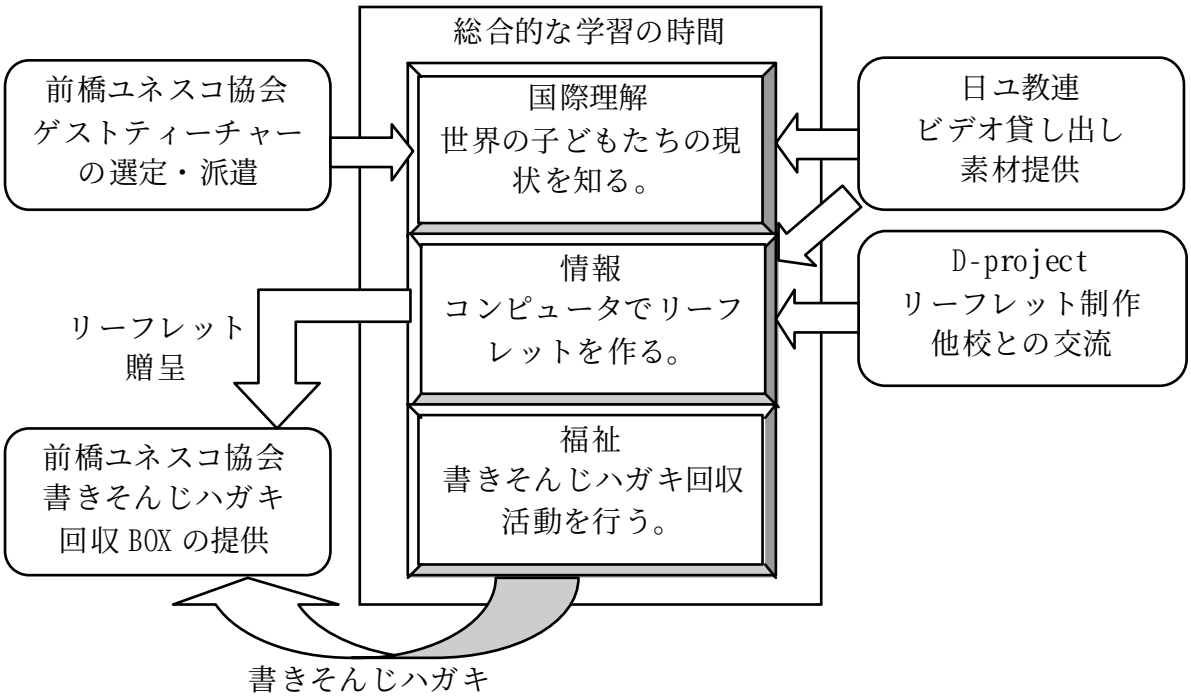


図１　活動の流れ

---

[1] デジタル表現研究会：http://www.d-project.jp/main.html
[2] (社)日本ユネスコ協会連盟：http://www.unesco.or.jp/
[3] 世界寺子屋運動：http://www.unesco.or.jp/contents/tera/index.html
[4] リーフレット制作プロジェクト：http://www.d-project.jp/2005/unesco/index.html

Ⅲ　年間活動計画

60 時間予定

段階	期間	主　な　活　動
準備 （10 時間）	４月～10 月	○コンピュータの扱いに慣れる。 （キーボード入力，ペンタブレットなど）
学びのターム （15 時間）	５月～９月	○ビデオや Web ページ，ゲストティーチャーなどから，ユネスコや世界寺子屋運動について学ぶ。 ○リーフレットの構成要素を知る。 （キャッチコピー，ボディコピーなど） ○色相や明度・彩度などを知る。
創作のターム （18 時間）	10月～12月	○キャッチコピー，ボディコピーを考える。 ○全体の配置を考える。 ○コンピュータを使って，リーフレットを作る。
交流のターム （５時間）	９月～２月	○Web 上の掲示板を使って，他の学校の児童・生徒と交流する。
活動のターム （７時間）	12 月～１月	○学校内で「書きそんじハガキ」回収を呼びかける。 ○地域に出て「書きそんじハガキ」回収をお願いする。
発表のターム （５時間）	２月	○活動の成果をまとめ，発表する。 ○地域のユネスコ協会に集めた「書きそんじハガキ」を贈呈する。

Ⅳ　主な活動

１．学びのターム（５月～９月）

(1)　ビデオ視聴

日本ユネスコ協会連盟では，児童・生徒の学習用にビデオセットを貸し出している。この中から，世界寺子屋運動のシリーズ６本（１本の上映時間は 10 分～15 分）を借用し，児童に視聴させた。

最初の授業では,ユネスコと世界寺子屋運動を紹介するビデオを使用した。この授業は，学校公開日に学年全体で行い，保護者にも参加してもらった。ビデオの内容をよりよく理解させるために，ワークシートを用意し，ビデオの中の大切な部分はプレゼンテーションソフトで投影しながらクイズ形式で確認した。

この時点では,今後の活動については触れず,児童に自由な感想を持たせるにとどめた。ワークシートに書かれた児童の感想の一部を下に記す。ほとんどの感想が下記のようなものであった。保護者からも，連絡帳などを通して，同じような感想が寄せられた。

※児童の感想
「学校に通えない子どもたちがいるなんて知らなかった。」
「文字が読めない人たちはかわいそう。」
「日本に生まれてよかった。」

その後，国別の寺子屋の様子を視聴する授業を行った。１本のビデオを見た後，わかったことや感想を書かせる形式で行った。回を重ねるごとに，自分たちと比べて恵まれない環境の中でがんばる子どもたちの姿に共感する意見が増えてきた。

(2)　Webページの活用

ビデオでの学習を進めながら，コンピュータ室でユネスコのWebページを見させた。ビデオで見た内容を確認しながら，わかったことをメモさせた。

Webページの検索ができる児童は,「世界寺子屋運動」などのキーワードから，自分でWebページを探して調べ始めた。中には，D-projectのWebページを探し当て，リーフレット制作に興味を示す児童が出てきた。

教師主導でリーフレット制作に取り組ませるのではなく，児童の中からリーフレットを作ろうという意見が出てくることによって，リーフレット制作に主体的に取り組めるようにした。

そのための仕掛けとして，学校のWebページのリンク集に,「リーフレット制作プロジェクト」へのリンクを設定しておいた。

図２　プロジェクトのページ

(3)　ゲストティーチャー

夏季休業中に学年主任が前橋ユネスコ協会主催の「国際理解バス」に参加した。前橋市内の中学・高校生と一緒に,[1]独立行政法人国際協力機構ジャイカ（JICA）東京国際センターの見学と，研修に来ている外国人との交流活動に参加してきた。その経験を，夏休み明けに学年集会で児童に報告した。

身近な担任の先生が直接参加してきたということで,子どもたちは暑い日ではあったが,映し出される写真を食い入るように見つめ,真剣に聞いていた。

図３　国際理解バスの話

図４　パラグアイでの生活の話

また,南米での海外生活経験がある教員から,その国の生活や子どもたちの様子の話を聞いた。身近な人から話される地球の裏側の話は，ビデオでは得られない貴重な経験となった。

特に，貧しい暮らしをしている子どもたちが多い地域の話は，ビデオの映像にも負けないようなインパクトで子どもの心に響いた。

最後に，写真のスライドショーを映しながらパラグアイの楽器を演奏してもらった。

児童は，今まで知らなかった国の暮らしを聞き，日本との違いに驚いたという感想を書いた者が多かった。

リーフレット制作に入る直前に，前橋ユネスコ協会にゲストティーチャーを依頼した。実際に寺子屋建設に関わった方を招き，児童に直接語りかけてもらった。

---

[1] 独立行政法人国際協力機構ジャイカ JICA：http://www.jica.go.jp/Index-j.html

ゲストティーチャーは，群馬県ユネスコ協議会の会長で，何度もベトナムに行き，寺子屋の設立やその後の様子を見てきた方である。実際に寺子屋で学習している子どもや大人の様子を，写真を見せながら話してくれた。

ビデオだけではわからない生々しい話を聞き，自分たちの恵まれた環境に感謝するとともに，テントや木の下でもがんばって勉強している子ども達の姿を見て，自分たちもがんばろうという気持ちをもった児童が多かった。

図５　ゲストティーチャーの話

児童が書いた感想は以下のようなものである。

※児童の感想
「群馬県でもこんな活動をしている人がいることがわかった。」
「自分も募金したい。」
「自分たちの力でできることをしてみたい。」

これを読むと，何か行動を起こそうという意欲を持ってきたことがわかった。ビデオでの学習を始めた時の「かわいそう。」から，児童の心が変化してきたことが分かる。

２．創作のターム（10 月～12 月）

世界寺子屋運動について学ぶ中で,「書きそんじハガキ」を集めたいという意見が出るようになってきた。そこで，たくさん集めるための方法を話し合った。

児童から出された意見は，ポスターを作ろうというものだった。そこで，リーフレットという言葉を教え，Ａ４版で表現してみることを提案した。人の目を引き付けるには，カラー印刷しなければならない。また，大量に作りたい。ということから，コンピュータを使って作る方法があることを助言した。

コンピュータを使ってリーフレットを作る活動がメインであるが，すぐに作り始めず，半年をかけて児童にはたらきかけてきたのは，リーフレットを作る必然性が児童の心の中に生まれる「しかけ」なのである。

児童は現地の物価から金額を計算し，３万枚の「書きそんじハガキ」が集まれば一棟の寺子屋を建てられると予想した。全国 19 の小・中・高等学校で取り組んでいるプロジェクトだけで寺子屋を建設することは難しいが，がんばろうという気持ちをもって取り組み始めた。

リーフレットに使う写真素材は，(社)日本ユネスコ協会連盟から提供された。また，同連盟のロゴマークの使用も許可された。日本ユネスコ協会連盟公認のリーフレットを作るということで，子どもたちの意欲はさらに高まった。

(1)　リーフレットの構成要素

リーフレット制作の前に，前年度の作品を見ながらその構成要素について話し合った。その結果，以下の要素に分類された。

① 手にとってもらえる美しいデザイン
② 人の目を引き付けるキャッチコピー
③ 時間がない人でもすぐに内容を理解できる簡潔なボディコピー
④ キャッチコピーからボディコピーに自然に目を誘導するデザイン
⑤ 説得力のある写真

図６　リーフレットの例

まず，色について学習した。色のもつイメージを分析し，表現したいことにぴったりの色合いを考えさせた。また，明度・彩度について実例を挙げながら見え方を考えさせた。

次に，キャッチコピーを考えさせた。言いたいことを一言で表す言葉は，国語の学習「見出しをつけよう」と連携しながら行った。長すぎず，人目を引き付けつつ言いたいことが伝わる言葉を考えることは，国語の学習としても良い題材だと考える。言葉を「ダイエット」し，それぞれの思いを伝えるキャッチコピーを作った。

ボディコピーは，限られた紙面で伝えたいことをもれなく伝えるために，何度も書き直しながらより良い表現を考えさせた。なぜこの活動をしているのか。なぜ「書きそんじハガキ」なのか。読むだけで伝わる文章を書くことに児童は苦労していた。

それらを組み合わせてＡ４版の紙に下書きさせた。中には，色の指定まで書き込んでいる児童もいた。

(2)　コンピュータの活用

下書きを元に，コンピュータを使ってのリーフレット制作を始めた。

実際の制作は，写真を入れ，キャッチコピー，ボディコピーを入れ，背景を決めれば出来上がりである。速い児童は１時間で作り上げることができる。遅い児童でも３～４時間あれば作ることができる。

時間がかかるのはこの後である。プリントアウトしてみて，全体の印象や色合いを見たり，友だちに文を読んでもらったりすると，修正すべき点がどんどん出てくるのである。

児童は何度も修正し，自分の気に入った作品を作り上げていった。画用紙に手描きしたポスターを修正することは困難であり，ここまでやり直そうとする児童はいないものと思われる。コンピュータを使うことで，修正が容易になり，自分の思いを表現するということに集中することができるのである。

図７　リーフレットの例

リーフレット制作プロジェクトでは，参加している 19 校から，各校２点の代表作品を集めてコンテストを行っている。その中の最優秀作品が次年度のユネスコの正式なリーフレットとして全国に配られるのである。そこで，学年全員の作品をプリントアウトし，全て掲示した上で校内選考会を行った。児童全員が代表にふさわしいと考える作品に投票する形式で行い，代表２点を選考した。

代表になった作品は，D-project の Web ページで投票によって審査される他，Ａ２版の大きさに拡大印刷され，東京で行われる D-project 春の公開研究会の会場で，参加者からも投票してもらい，最優秀作品を決めるのである。

学校代表になった二つの作品は，大判プリンタで印刷し，校内にポスターとして掲示しておいた。代表に選ばれなかった作品は，プロジェクトの事務局によってＣＤにまとめられ，参加した全ての学校に配布された。

図８　春の公開研究会の会場にて

児童は，自分の作品をプリントアウトし，１枚は記録としてファイルに保存した。フルカラーで何枚でも作れるのは，コンピュータならではのものであろう。

３．交流のターム（９月～２月）

(1)　掲示板の活用

D-project に参加している北海道から九州の 19 校の小・中・高等学校の児童・生徒と，Web 上の掲示板を使って交流した。これは，同じ活動をしている子どもたちの様子を知り，リーフレット制作への意欲を高めるとともに，交流を図る目的で行った。

掲示板は，ＩＤとパスワードによって管理され，プロジェクト参加者以外のアクセスはできないようになっているため，児童は安心して書き込むことができる。

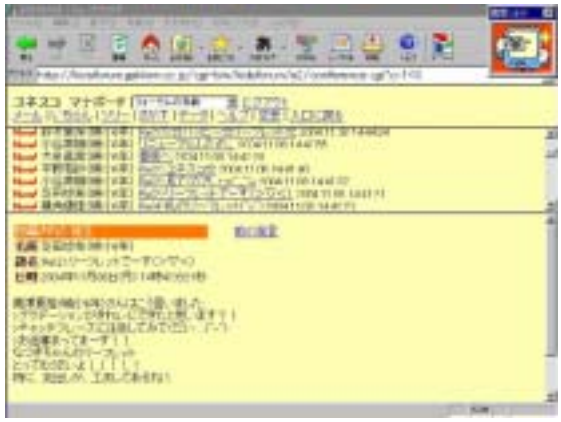


図９　ユネスコ　マナボード

掲示板の名前は「ユネスコ　マナボード」という。これは「マナーを守って学び合う掲示板（ボード）」の意味である。担任の指導の下，限られたメンバーのみが書き込める掲示板ではあるが，情報モラルの指導を兼ねて，画面の向こうの友だちを意識させた。掲示板に貼り付けられたリーフレットを見て，その作品に対するコメントを書き込むことができる。その際，悪いところをけなすのではなく，良いところを見つけ，「こうすればもっと良くなる。」というアドバイスをするように指導した。ところが，「先生，そんなことは当たり前でしょ。書きそんじハガキを集めるために，一生懸命作ったものだもん，けなすわけないよ。」と言われてしまった。目的意識をしっかりもって制作に取り組む気持ちを見たような気がした。

(2)　テレビ会議

インターネットを使った交流活動の一つであるテレビ会議であるが，今回は断念した。難しい説明は省くが，ネットワークの問題で，外部とのやり取りには厳しい制限があるのである。

その代わりにはならないが，４校同時接続で行ったテレビ会議の様子を記録した DVD を送ってもらい，雰囲気だけは味わうことができた。

４．活動のターム（12 月～１月）

(1)　校内での活動

年賀状のシーズンを前にして，校内で「書きそんじハガキ」回収キャンペーンを行った。まず，リーフレットを印刷し，校内に掲示した。その後，授業前の時間に校内の全学級に５年生の児童が出向き，寺子屋を必要としている子どもたちの現状や，自分たちの活動について説明しながら，全児童に自分たちが作ったリーフレットを配布した。特に，低学年の教室に行った班は，分かりやすい言葉で話すよう工夫したり，寸劇を作って説明したりするなどの工夫が見られた。

図 10　教室でのキャンペーン

通常は，１校に一つだけ送られる「書きそんじハガキ回収 BOX」だが，前橋ユネスコ協会にお願いして 50 個用意していただいた。そのうちの 23 個を各教室に置き，職員室と玄関に各１個設置した。

この時期，学校には「書きそんじハガキ」やテレホンカードなどの募集がたくさん寄せられるが，児童会の担当と話し合い，「書きそんじハガキ」は５年生にまわしてもらうことにした。

上記の活動の結果，校内でおよそ 500 枚の「書きそんじハガキ」を集めることができた。

(2)　地域社会での活動

さらに多くの「書きそんじハガキ」を集めるための方法を話し合い，地域の商店などに「書きそんじハガキ回収 BOX」を設置してもらうということになった。各クラスで６ヶ所を担当し，全部で 24 の商店等に「書きそんじハガキ回収 BOX」を置くことになった。当初募金箱を設置するという案も出されたが，現金の管理をお願いするのはお店の方に迷惑であろうということで「書きそんじハガキ」のみの回収となった。

図 11　班ごとに設置を依頼

リーフレットを読んでもらい，「書きそんじハガキ」を持ってきてもらうためには，人がたくさん訪れる場所でなければならない。しかも，それを読んだ後でまた訪れる場所でなければならない。そんな条件に合う場所を児童の視点で考えさせた。その結果，右図のような場所に設置することに決まった。

・商店・・・・６
・病院・・・・５
・コンビニ・・４
・飲食店・・・３
・学校等・・・３
・公共施設等・２
・スーパー・・１

図 12　回収 BOX 設置場所

回収 BOX は，お年玉つき年賀はがきの抽選発表の前に設置し，発表後２週間で回収に行くことにした。

各学級で４～５人の班を作り，一つの場所を担当してお願いに行った。その際，班の代表リーフレットを２作品持参した。回収 BOX とリーフレットを目立つ位置に置かせてもらえるようにした。設置場所の方に対するお願いの仕方は，事前に学級内で練習し，失礼のないように努めさせた。

回収 BOX 設置後に，自分たちの箱の中身が気になって何度も訪れ，１枚も入っていなか

ったので,自分で入れてきたという児童もいた。

回収 BOX の回収も,児童の手によって行った。設置させていただいたお礼を言い，回収してきた児童は，入っていた枚数によって表情が違ったが，それぞれに満足したようであった。

一ヶ所あたりの最高は，地域の中華料理店に設置した回収 BOX で，約 300 枚の「書きそんじハガキ」が入っていた。残念ながら１枚も入っていないものもあった。寒さの厳しいこのシーズンは，風邪を引いて病院に行く人が多いだろうと考えたのだが，風邪では繰り返し病院に行かないようである。児童は設置した場所が悪かったと考え，きちんとお願いとお礼が言えたことに満足していた。

図 13　回収後の児童

この活動により，133 人の児童が集めた「書きそんじハガキ」は約 1,000 枚である。しかし，お店の人から励ましの言葉をもらったり，地域の方に声をかけていただいたりした児童は，枚数以上のものを受け取ることができたようである。

５．発表のターム（２月）

(1)　贈呈式の実施

活動のまとめとして，前橋ユネスコ協会の方を学校に招待し,「リーフレット」と「書きそんじハガキ」の贈呈式を行った。贈呈式は，各クラスの代表者による実行委員会の企画・運営で行われた。

最初に，今までの活動を振り返る意味で，各学級の児童によって「ユネスコについて」「世界寺子屋運動について」「リーフレット制作の様子」「書きそんじハガキの回収活動」などの発表が行われた。

背中にユネスコの４つの柱を貼り付けて発表したり，世界寺子屋運動の必要性を寸劇にして発表したりと，それぞれのチームに工夫が見られた。活動に関するクイズは，ほとんど全員が正解でき，児童の学習は深まったと考える。

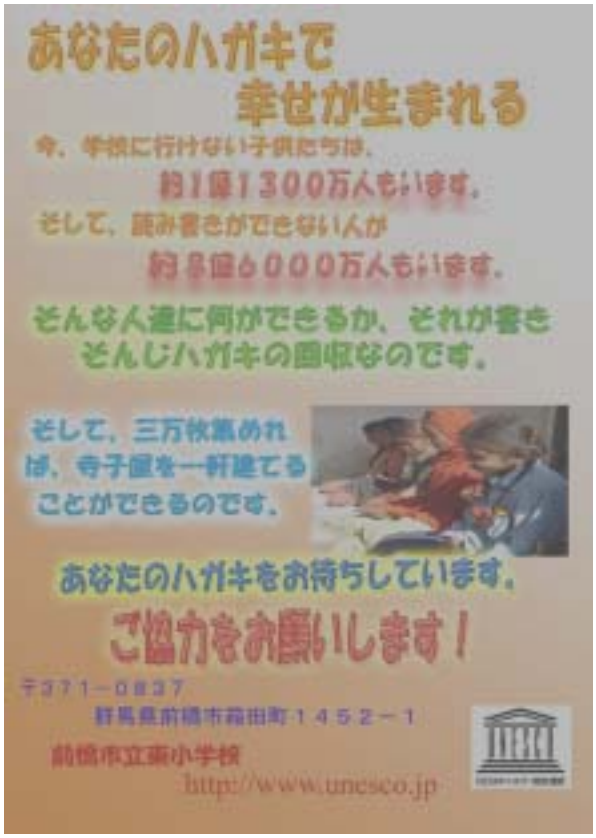
図 14　ユネスコについての発表

その後，児童がリーフレットを使った活動で集めた「書きそんじハガキ」約 1,500 枚と，制作したリーフレット 133 枚を前橋ユネスコ協会の庭屋副会長に贈呈した。

最後に，副会長から，日本ユネスコ協会連盟からの感謝状を渡していただいた。副会長のお話では，児童の学んだことの素晴らしさについてほめていただいた。何より，贈呈式に参加している児童の表情が一つのことをやり遂げた満足感でキラキラ輝いているというお話で，児童はこの活動を満足して締めくくることができた。

図 15　書きそんじハガキの贈呈

Ⅴ　成果と課題



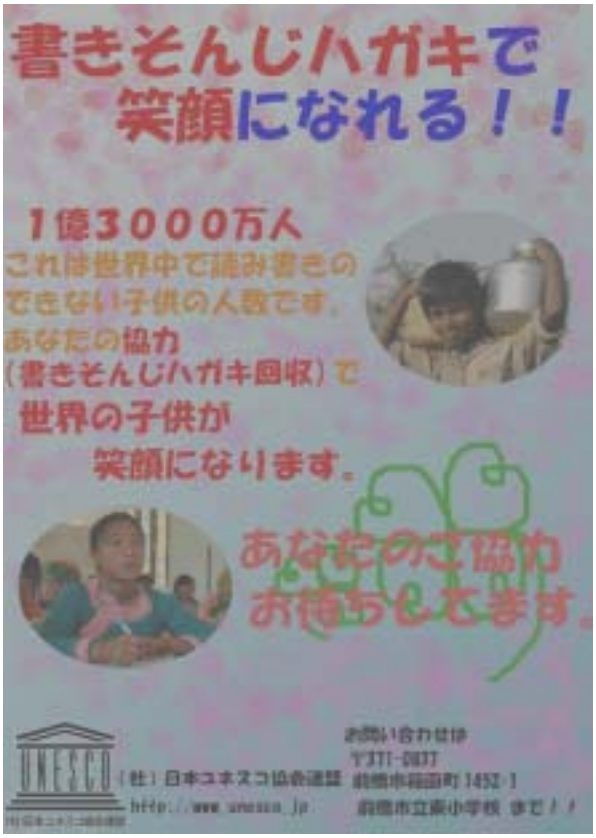


図 16　学校代表に選ばれた２点のリーフレット

(1)　成果として

５年生が年間を通した総合的な学習の時間の活動として取り組んできたが，欧米だけではない外国の同年代の子ども達の様子を知ることからスタートし，世界的規模でものを考える（Think Globally）ことができるようになった。これは，21 世紀の日本人として生きる児童にとって，大切な国際理解であると考える。

また，自分の思いを伝えるために，コンピュータを活用してリーフレットを作る中で，コンピュータのリテラシーだけではなく，キャッチコピー等を工夫していく情報リテラシーを高めることもできた。また，国内の様々な学校の児童・生徒との交流も図ることができた。

さらに，世界寺子屋運動について，自分たちでできる活動を計画し，校内や地域で「書きそんじハガキ」回収活動を行うことができた。これは，ボランティア活動としても優れているものだと思う。校内の児童や地域の人々とのかかわり合いの中で，自分の足元を見つめ，今の自分にできることを実践する（Act Locally）ことができた。

これらの活動を通して，国語や図工で学習した内容を実践的に生かす経験ができたことも大きな成果である。

この活動を通して，児童に十分な情報を与えることによって，自分たちで考えて行動を起こすことができるということも分かった。ビデオ視聴やゲストティーチャーによる講話などの学習をする中で，児童の心の中に生まれたあたたかい心が，リーフレットとして形になり，回収活動という動きに発展していったものであると考える。

後になって，日本ユネスコ協会連盟の方から聞いたことだが，本校の児童が，自分の小遣いを寄付していると言う。ユネスコの機関紙についているアンケートのハガキに鉛筆で

感想が書かれているものがあって，見てみたら本校の児童だというのである。児童の心が刺激され，このような行動になったものと思われる。

さらに，学校だけの力では困難な活動ではあったが，前橋ユネスコ協会と連携することで，活動を深めることができた。学社融合の一つの形になるのではないだろうか。

(2) 課題として

このような活動をするに当たって問題になるのは，お金のことである。地域社会には優れた人材がたくさんいて，教育活動に生かせば大きな成果が上がるのだが，その方たちを呼ぶための予算がないということである。今回のゲストティーチャーについても，交通費等は前橋ユネスコ協会に負担していただいた。ユネスコから借用したビデオについても，送料は学校で負担しなければならない。こういうお金を予算化することは難しいとは思うのだが，何とかならないだろうか。

また，学校では１年ごとに人員が変わり，活動を継続していくことが困難であることが挙げられる。

今回のような活動が広まるように，多くの人に伝えていく必要があると考え，本稿を書いている。マニュアルにはならないとは思うが，参考程度になれば幸いである。

Ⅵ　おわりに

１年間かけて取り組んだ活動を終え，あらためてまとめてみると様々な反省点が出てくるものである。

D-project 春の公開研究会では，プロジェクト参加校の児童がたくさんの教員の前でプレゼンテーションを行っていた。自分たちの活動について自信をもち，堂々と発表する姿は，この活動で得たもののすばらしさを現しているように感じた。

図 17　D-project 春の公開研究会より

最後に児童が書いた作文の中には，小さいながらも国際貢献できた満足感が溢れていた。また，自分たちでも行動を起こせば地域社会が動くことを知り，自分たちが持っている無限の可能性について書いた児童もいた。

今後は，コンピュータやインターネットをさらに活用し，国内の様々な学校との協働学習にも取り組んでみたいと考えている。

なお，本実践を行った教員は，以下の４名である。
※学級名は当時，右の学校名は現在の勤務校である

学年主任：	１組担任	木原とき江	前橋市立東小学校
	２組担任	堀澤　直樹	前橋市立大胡東小学校
	３組担任	塩澤　孝行	前橋市立東小学校
	４組担任	小渕　早苗	前橋市立東小学校